《修士論文要旨》

孤独感が犯罪に及ぼす影響について

中　村　大　輔*

万引きの研究の後、考えられた動機のひとつに、真面目で内向的な性格から孤独感という言葉にたどり着いた。孤独感は万引きに限らず、ニュースや新聞等で報じられる、その他の犯罪にも感じられる。非行・犯罪仲間が段々力を増し、集団心理的に凶悪犯罪を起こすというケースというよりも、「成績は優秀だが、孤独で友達がおらず、ひきこもりがちである。」という人物が突如凶悪事件を起こすケースが多いように感じる。そして、ひきこもっているがゆえに、自らの世界を構築してしまい、自分中心に創り上げているものと、現実での世界が一致せず、他人との接触を極端に苦手にさせ、肥大した自尊心と自己愛を持ち、感情のコントロールが出来ず、共感性に乏しくなると考えた。また、他人とコミュニケーションを取れないために、悩みやストレスを自分の中に溜め込んでしまう傾向にある。感情のコントロールが出来ないために、ギリギリの状態に置かれ、その結果常識では考えられないような凶行に走ってしまうのではないだろうか。そこで今回「孤独感」というテーマを設け、どのような孤独感が、どのような犯罪へ影響を与えているのかを調査を踏まえて研究を進めた。研究の結果、犯罪非経験者の方が犯罪経験者に比べ孤独感が高いということがわかった。このことから、「犯罪を行うことで孤独感が減少していること」「犯行時の感情と現在の感情が一致していないこと」「犯罪を行えない自己主張の低さ」等、いくつかその理由が考えられる。確かなのは犯罪を行った者の方が、孤独感が低いということであり、犯罪行為は孤独感を減少させる要因となるのかもしれない。現在犯罪をしていない者の中に犯罪予備軍と言える者がいないとは限らず、孤独感を感じた時に、犯罪ではなく、どのように克服するかが課題である。

平成20年度　*社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）